

A. サン＝レオン著『ステノコレグラフィ』に見出すクペの歴史的連続性 —— 他の時代のクペとの比較を通じて

成城大学 吉田 久瑠実

バレエの名作《 Coppélia 》(1870)を振り付けた A. サン＝レオン(1821-1870)は、19世紀バレエの練習内容を独自の記譜法で記した著作『ステノコレグラフィ』(1852)を出版した。本発表では、バレエ史を通じて多用されてきたクペ(coupe)と呼ばれるステップに着目し、同書に記述されたクペの再現を行う。そして、他の時代のクペとの比較を通じて、17世紀から現代にかけてのクペの連続性を示すことを目的とする。

クペは、フランス語の「切る」(couper) ことに関連するステップであり、現代イギリスのバレエの教育機関であるロイヤル・アカデミー・オブ・ダンスによると「片方の足でもう片方の足を切り離す動作」と定義される。つまり、左右の足を踏み替えるステップである。一方、17世紀のクペは R. A. フィエの『コレグラフィ』(1700)によると、一般にドゥミ・クペ(伸び上がりを含む一歩)に通常の一歩を加えたものとされ、現在のものとは異なっている。

違いが生じた理由として、19世紀にクペが多様化していたことが挙げられる。S. N. ハモンド(1984)によると19世紀初頭のクペは、バロック時代のものに明確に関係するもの、現在とほぼ同じもの、19世紀独自のものに分類される。また、譲原晶子は『美学』掲載論文(2004)において、19世紀の複数のクペがいずれも18世紀以前のクペと関連する一方、その根拠は特定の文献において言及されているわけではないと述べている。このように従来の研究ではクペの歴史が漸絶的に捉えられている。

本発表が注目する『ステノコレグラフィ』にはクペが3箇所確認できる。それらを復元し、分析すると練習例9と10のものと練習例26のもの2種類に大別できる。フィエの『コレグラフィ』に掲載されたクペの一覧表と照らし合わせると、前者はドゥミ・クペにその場での横への開脚動作を加えたクペの一種に似ていることが明らかになる。一方、後者は左右の足を踏み替えるもので、現代のクペに似ているが、フィエが例示した横に進むクペともほぼ同じ足運びであることが判明する。つまり『ステノコレグラフィ』のクペは全てフィエのものに由来し、そのうちの一種は現代のものに繋がっているのだ。

逆に、フィエのクペのうちドゥミ・クペをした後に開脚動作を続ける形式と横に移動する形式のみが、A. サン＝レオンにまで伝わったとも言える。このことはフィエの時代よりも19世紀には、観客に身体を見せる踊り方が追求されるようになったことを表している。つまり、一歩とその場での開脚動作で構成されるクペ(練習例9・10)が残ったことは、距離を長くすることよりもダンサーの身体を見せることへと関心が移行したことを意味する。また、横に移動するクペ(練習例26)は客席に相対したまま側方への移動を可能にしたがゆえに重宝された。